
「水田文化」の提唱

共同研究「日本歴史における水田環境の存在意義に関する総合的研究」の経過と今後の展望

安室 知

1 共同研究のタイトル

個別共同研究「日本歴史における水田環境の存在意義に関する総合的研究」

研究期間：平成 17 年度～ 19 年度

2 研究の目的

歴史的にみると、近代以前において日本の稲作は生業として強い特化傾向を示し、結果として水田率 90 パーセントを超えるような水田稲作に高度に特化した地域が日本各地に形成された。しかし、生活者の視点に立つとき、そうした水田環境は稲作のためだけに利用されてきたのではなかったことは明白である。

たとえば、内水面漁撈の主たる漁場は、従来、湖沼と河川に大別されてきたが、稲作との複合関係でみていくとき、水田が漁場として重要な意味を持っていたと考えられる。農業や化学肥料が導入される以前の水田は稲を作るだけの空間ではなく、ドジョウやフナといった魚類においては重要な繁殖の場となっており、人はそうした魚介類を対象とした漁撈活動をおこなってきた。また、日本列島の場合、人工的な湿地ともいえる水田には、ガン・カモ科の鳥類をはじめとして多くの渡り鳥が越冬のために訪れるが、そうした鳥類を対象とした狩猟活動が水田耕作者によっておこなわれてきた。

そうした複合生業の視点をもって日本列島の水田環境を眺めたとき、稲作だけでなくさまざまな機能が水田には備わっていたことが理解される。また、生業だけでなく、信仰・儀礼や日本人の自然観の形成といった精神文化にまでそれは及んでいると考えられる。

そしてまた、現在は、1999 年に新農業基本法（食料・農業・農村基本法）が施行され、圃場としての機能だけでなく、環境の保全、景観の形成、地域文化の継承といった水田環境が有する多面的機能が見直されてきており、水田環境の持つ意義をさまざまな視点から考究することは現代的課題ともなっている。

そうした点を踏まえ、民俗学・文献史学・考古学・歴史地理学などの人文科学を中心としながらも、環境社会学・農村計画学といった社会科学、および魚類生態学・昆虫生態学・鳥類生態学・自然地理学などの自然科学の研究者をまじえて学際的に討論し、日本列島における水田環境の存在意

義について歴史的かつ現代的視点を持って考察することが本研究の目的となる。

3 研究メンバー

[共同研究員]

- 今里悟之 大阪教育大学教養学科・人文地理学
大場信義 産業総合技術研究所・昆虫生態学
大畑孝二 豊田自然観察の森・鳥類生態学
菊地直樹 姫路工業大学自然環境研究所・環境社会学
佐野静代 滋賀大学教育学部・歴史地理学
角南聡一郎 元興寺文化財研究所・考古学
大門 哲 石川県立歴史博物館・民俗学
中島経夫 滋賀県立琵琶湖博物館・魚類形態学
春田直紀 熊本大学教育学部・日本中世史学
日比野光敏 名古屋経済大学短期大学部・民俗学
福澤仁之 首都大学東京都市環境学部・堆積学
山下裕作 農村工学研究所・農村計画学・民俗学
◎安室 知 国立歴史民俗博物館研究部・民俗学
篠原 徹 国立歴史民俗博物館研究部・民俗学
西谷 大 国立歴史民俗博物館研究部・考古学
吉村郊子 国立歴史民俗博物館研究部・生態人類学

* ◎は研究代表者を示す。

* 共同研究員の所属は平成19年度現在のものである。

[ゲスト・スピーカー]

- 渡部鮎美 総合研究大学院大学大学院生
前畑政善 滋賀県立琵琶湖博物館
江浦 洋 大阪府文化財調査研究センター
嶺田拓也 農村工学研究所
平野哲也 学悠館高校
甲斐良治 農文協地域形成センター
豊島 至 農文協地域形成センター
西川和孝 中央大学大学院生
安達真平 京都大学大学院生
山田伊澄 農村工学研究所

* ゲストスピーカーの所属は基本的に共同研究会での発表当時のものである。

4 研究の経過

[平成 17 年度]

- 第 1 回研究会 平成 17 年 6 月 11・12 日 (土・日) 歴博第 2 会議室
 共同研究発足の経緯と趣旨説明 安室 知(共同研究員)
 研究発表 1 「現代社会と水田漁撈」 安室 知(共同研究員)
 研究発表 2 「歴史学における生業論の登場と変遷」 春田直紀(共同研究員)
- 第 2 回研究会 平成 17 年 10 月 1・2 日 (土・日) 歴博第 2 会議室
 研究発表 1 「伝承という実践」 山下裕作(共同研究員)
 研究発表 2 「田の美しさ」 渡部鮎美(ゲストスピーカー, 総研大大学院生)
 研究発表 3 「雲南国境地帯の棚田」 西谷 大(共同研究員)
- 第 3 回研究会 平成 18 年 2 月 4・5 日 (土・日) 歴博第 1 会議室
 研究発表 1 「水田とその周辺にすむホタルの行動習性の多様性と進化」 大場信義(共同研究員)
 研究発表 2 「魚類のゆりかごとしての水田の機能」 前畑政善(ゲストスピーカー, 琵琶湖博物館)
 研究発表 3 「水田環境と地球環境の将来予測」 福澤仁之(共同研究員)

[平成 18 年度]

- 第 1 回研究会 平成 18 年 5 月 20・21 日 (土・日) 滋賀県立琵琶湖博物館
 *琵琶湖博物館「東アジア総合研究」研究会と共催
 研究発表 1 「コイ科魚類と環境史」 中島経夫(共同研究員)
 研究発表 2 「水田遺構の考古学的調査」 江浦 洋(ゲストスピーカー, 大阪府文化財調査研究センター)
 研究発表 3 「田んぼ周りの草とのつきあい」 嶺田拓也(ゲストスピーカー, 農村工学研究所)
 研究発表 4 「水田プロジェクトの概要」 前畑政善(ゲストスピーカー, 琵琶湖博物館)
 研究発表 5 「コイ科魚類と水田の環境史」 安室 知(共同研究員)
- 第 2 回研究会 平成 18 年 9 月 2・3 日 (土・日) 歴博第 1 会議室
 研究発表 1 「江戸時代後期における地域資源の活用と生業連関」 平野哲也(ゲストスピーカー, 学悠館高校)
 研究発表 2 「若者に学ぶ, 農村回帰の本当の理由」 甲斐良治(ゲストスピーカー, 農文協地域形成センター)
 研究発表 3 「農家のイネづくりは, 今-『現代農業』の元気な事例から-」 豊島 至(ゲストスピーカー, 農文協地域形成センター)
- 第 3 回研究会 平成 19 年 2 月 2~4 日 (金~日) 田尻文化センター (宮城県大崎市)
 *冬水たんぼシンポジウム (ラムサール・フェスティバル 2007) に合わせて開催
 研究発表 1 「水田利用鳥類とその保全活動」 大畑孝二(共同研究員)
 研究発表 2 「生業変容と地域内労働力」 渡部鮎美(ゲストスピーカー, 総研大大学院生)
 研究発表 3 「冬期湛水に何を求め, 何が得られるのか」 嶺田拓也(ゲストスピーカー, 農村工学研究所)

[平成19年度]

- 第1回研究会 平成19年7月20・21日(土・日) 国立歴史民俗博物館
- 研究発表1 「文献史料から見る雲南省元陽一帯における生態環境の変化」
西川和孝(ゲストスピーカー, 中央大学大学院生)
- 研究発表2 「雲南省哀牢山地における多民族棚田地域の形成と水資源の利用」
安達真平(ゲストスピーカー, 京都大学大学院生)
- 研究発表3 「都市地域の小学校における農業体験学習の実態と効果」
山田伊澄(ゲストスピーカー, 農村工学研究所)
- 第2回研究会 平成19年11月17～19日(土～月) 岩手県岩泉町・久慈市
*岩手大学雑穀研究会・農村工学研究所プロジェクト研究会と共催
- ・11月17日 巡検・研究発表
岩泉町大川地区ほか雑穀栽培地の巡検調査
研究発表 「人糞肥料に関する人類学的研究」 角南聡一郎(共同研究員)
- ・11月18日 雑穀フォーラム 岩泉町民会館
研究発表1 「人為的自然と生業－作られた自然を巡って－」 篠原 徹(共同研究員)
研究発表2 「餅と日本人」 安室 知(共同研究員)
研究発表3 「遊び仕事の伝承と地域の未来」 山下裕作(共同研究員)
研究発表4 「地域のための地域生物資源の活用と食」 茂木和人(スローフード岩手)
研究発表5 「農具による雑穀作り」 武田純一(岩手大学農学部)
研究発表6 「雑穀栽培体験交流からみえてきたもの」 鎌田拓也(岩手大学大学院生)
- *研究発表4以降は岩手大学雑穀研究会・農村工学研究所プロジェクト研究会の発表
- 座談会 岩泉町民との座談会
- ・11月19日 巡検
久慈市山根地区ほか雑穀栽培地の巡検調査
- 第3回研究会 平成20年2月23・24日(土・日) 国立歴史民俗博物館
- 研究発表1 「水田の民俗分類研究の課題」 今里悟之(共同研究員)
- 研究発表2 「田んぼを舞台にした生きものの語り方－コウノトリを中心に－」
菊地直樹(共同研究員)
- 研究発表3 「<水郷>のポリティクス－河北潟東北域における耕地整理事業の展開と史的背景－」
大門 哲(共同研究員)
- 研究発表4 「近代農村におけるヒマの発見」 渡部鮎美(ゲストスピーカー, 総研大大学院生)

5 研究の概要

[平成17年度]

第1回研究会において、研究代表者より本共同研究発足の経緯と趣旨説明をおこなった。

また、研究発表をもとに、これまでの民俗学および文献史学における生業研究のあり方および近年の研究動向についてメンバー全員で討論した。それにより、広義の歴史学分野における生業研究の必要性が再確認された。

第2回研究会では、研究発表をもとに、現代社会における水田環境と生業に焦点を当て、水田稲作および水田環境の持つ潜在的な力をこれからの社会にどのように取り込みかつ活用していくべきかを農業計画学・民俗学・考古学のそれぞれの立場から論じた。その結果、現代社会と水田環境および生業としての稲作との関係について、広義の歴史学分野においても研究対象化し、現代的課題として積極的に関与していくことの必要性が指摘された。

第3回研究会においては、研究発表をもとにして、おもに生態学や堆積学といった自然科学の分野から、生物の棲息地としての水田とその地球環境との関わりについて討論をおこなった。その結果、水田環境の有する生物多様性の意義、および稲作という人間活動と動植物のエコロジカル・ネットワークのかかわりについて理解を深めた。

[平成18年度]

第1回研究会では、琵琶湖をフィールドにして、水田をめぐる人と動植物の関係について、研究発表をもとに環境史的な観点から議論した。その結果、水田をめぐる人と魚類（とくにコイ科魚類）のエコロジカルな関係について、その歴史の変遷のあらすじを描くことができた。

第2回研究会では、水田環境の有する地域資源としての役割をテーマに、近世から現代に及ぶ時間幅の中で議論した。その結果、現代とくに1990年代以降は、水田環境が環境教育や環境倫理等の面において注目度が増し、より大きな役割を担うようになってきたことがわかった。

第3回研究会は、フィールドワークを兼ねて、冬期湛水水田を実践する宮城県大崎市（蕪栗沼周辺）で開催した。冬期湛水水田は、近年、ガン・カモ科鳥類を中心とした渡り鳥の飛来地保全のためになされるようになったものであるが、その発想は民俗世界においても「冬水田んぼ」というかたちで実践されてきたことがわかっており、両者の歴史的關係についてさまざまな角度から議論することができた。

[平成19年度]

第1回研究会では、中国雲南省の棚田稲作について研究発表をもとに、東アジア的視野から日本稲作の生態史について比較検討した。また、小学生の農業体験に関する研究発表をもとに、教育的見地から、稲作を中心とした農業の現代的意義について検討した。

第2回研究会では、水田稲作との比較研究のため、北上山地（岩手県岩泉町・久慈市）の雑穀栽培地帯において巡検調査をおこない、同時に岩手大学雑穀研究会・農村工学研究所プロジェクト研究会との共催で雑穀フォーラムを開催した。そうした雑穀栽培地域との比較検討により、生業技術・土地利用・食文化などさまざまな点において、水田稲作の民俗的特性を明らかにすることができた。

第3回研究会では、低湿な水田環境への人の適応のあり方および水田環境を媒介とした人と動物との関係について、研究発表をもとに検討した。また、そうした人の適応態をもとにした水田環境の民俗分類について、研究発表をもとに議論した。

6 「水田文化」の提唱に向けて - 今後の展望 -

水田とは何をするとところか、この問いかけに対するごく常識的な答えは、稲作（米作）の場ということになる。この答えは民俗学、文献史学、考古学といった広義の歴史学だけでなく、社会科学や自然科学においても共通するものである。しかし、近年では水田漁撈が提唱されるなど、それはひとつの偏った見方であることが明らかにされつつある。たとえば、生活者に話を聞き、それを重要な資料として用いる民俗学では、農村における当たり前の生活を見直すことで、水田環境に多様な意味を見いだす研究が進められている。本共同研究もそうしたスタンスに立って研究が進められた。

人文科学の分野において「稲作文化」は耳慣れた言葉である。「稲作文化」を冠した研究や書物はこれまで夥しい量にのぼる。しかし、本共同研究で問おうとしたのは、「稲作文化」ではなく「水田文化」についてである。

水田文化という見方をするとき、そこには大きな効用がある。ひとつは水田を媒介とした人と自然（生物）との相互関係に焦点を当てることができることである。こうしたことの根底には、それまで稲作文化論の多くが人間活動に主眼がおかれ、人が自然をどのように利用するかといった、いわば人から自然への一方的な働き掛けしか見てこなかったことへの反省がある。自然と人の関係はあくまで双方向的であり、人から自然へそして自然から人へという働き掛けの往復運動の中に形成されてきたことに改めて注意する必要がある。

稲作という人間側からの利用のあり方だけではなく、水田という環境に光を当てることで、人および他の生物の生息環境という側面がより鮮明となる。そうすることで新たな問題設定も可能となり、人文・社会科学と生物学など自然科学との接点にある新たな研究領域が浮かび上がってくる。本共同研究はその端緒を開いたにすぎない。

水田はあくまでも稲作のための人為空間に過ぎないが、そこには高度に適応した動植物が生み出され、人の暮らしとさまざまな関わることになる。たとえば、フナやコイ、ドジョウ、タニシといった魚介類（「水田魚類」）やガン・カモ科鳥類（「水田利用鳥類」）、イナゴなどの昆虫、およびセリやヒシといった植物は、水田環境を住みかや繁殖の場としているが、それはまた同時に人と共に稲作農民による漁撈・狩猟・採集といった生業活動の対象でもあった。

それにより、水田環境が生業の場としてどのような意味を持つに到ったのかを総合的に把握することが可能になる。稲作文化論では稲作にのみ注目が集まるが、水田文化とすることで漁撈・畑作・採集・狩猟といった生業複合の様相として、そこに暮らす人々の生活実態を捉えることが可能となる。

かつてのような単純な稲作単一文化論は修正されなくてはならないが、だからといって稲作を他の生業技術と相対化するという名目のもとに、稲作に高度に特化してきた歴史とその背景を無視してはならない。今後、水田文化という視座は行き過ぎた稲作単一文化論批判を是正することになると考える。

水田環境に光を当てることで、見えてくるものは大きく広い。それは蛸壺的な学問領域を越えて研究の視野を広げるのに役立つ。水田環境とは、水田および溜池・用水路網また里山といった水田

を取り巻く環境、つまり稲作のために改変された二次的自然環境の総体を意味する。歴史的に見ると、人里の多くは水田環境に改変されてきたと言ってよい。耕地だけでなく、水系や人里に近い山間地（里山）までもその影響を受けている。

水田は高度に管理された人為の場であるにもかかわらず、そこは多くの日本人に自然を感じさせる空間でもある。かつて水田稲作のような民俗技術は自然を改変するだけでなく、改変した中にいわゆる新たな第2の自然を生み出すことができた。日本人の自然観は人を寄せつけぬ大自然にあるのではなく、水田風景のような第2の自然にあると言ってよい。そのことは、水田をめぐる在来の民俗技術が自然との共生関係を維持する機能を有し、その共生関係に日本人は自然を感じてきたことを示す。

たとえば、現代の大学生に実際に自分が見たり触ったりしたことのある淡水魚を挙げてもらうと、コイやフナ、ドジョウなどほとんどが水田魚類であるし、またホタルやガン・カモ科鳥類は農村にとどまらず広く都市文化として受け入れられ、田園憧憬のモチーフとして数多くの詩歌や絵画の題材となっている。

そうした水田環境が民俗技術により維持されたのは1950年代までである。その後の水田は、用排水分離を基本とする土地改良の推進、大型農耕機械の導入、そして農薬や化学肥料の大量使用といったことにより、いわば工業論理化した空間になってしまった。そして、それにより水田環境がそれまで有していた第2の自然は完全に水田から排除されてしまったといえよう。

しかし、1990年代以降、ワイズ・ユース、サステイナビリティ、生物多様性といった環境思想の市民化・大衆化の流れの中、たとえば棚田のように水田環境は再評価され注目を浴びてきている。そうしたとき、広義の歴史学分野においても、「稲作」から離れて「水田」という視点から日本また東アジアの歴史を見直してみることが、現在の課題に対応しうる歴史学を目指すには不可欠なものとなってきているといえよう。本共同研究の今後の課題であり展望としたい。

(神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究員)